



住宅街の小さな喫茶店、自宅兼店舗のエントランスにかかっているのは自筆の看板。慎重しやかに、ここが店であることを告げています。木々の緑に囲まれた店内の小さなテラス、空が高い夏の午後、一杯のコーヒーといっしょにテラスでまどろむひととき。それはとてもぜいたくな時間かもしれません。ちよつとはずれて迷い込んだ小さな空間でひと休み。

昨年3月、群馬県前橋市から転居して自宅兼店舗を建てました。名前は「きつき」さくら」。

「喫茶」とは、禅の言葉でもおとなしの心を表すそうです。

「ドアを開けたら肩書きは一切関係なく、同じようにおもてなしをします、という意味。『作業(さくら)』には3つ意味があって、『小さなことでも楽しみを作りましょう』『桜の花の散り際のように潔くありたい、という思い』『フーテンの寅さんの妹、さくらさんのように、地に足をつけて生きていきたい』『いい』という思いがこもっているんですよ」。

メニューは具だくさんカレーライス、スパゲッティ、コーヒートイオオソドックスなもの。なぜか韓国で評判になっているのだそう。

理由は、韓国人対象に昨年7月と今年1月に行った日本語研修で日本語教師だったから。お店に食べに来た研修生が、小さな店とカレーの味を伝えたのでしょう。国際感覚豊富な話題とも相まって、韓国からのお客様さまに好評だったようです。

40歳代まで世界中を旅してきました。貿易会社を退職してイタリアから帰国し、いつか落ち着いたのは

富良野。「北海道の友達に帰国あいさつに来て美瑛、富良野を通ったら風景がイタリアのトスカナ地方にそっくりだったんです。それで四季を経験したいな、と1年間だけのつもりで住んだ」生活は、結局約10年にもなつたそうです。

「でも心が落ち着かなかった」と終(つい)の棲家(すみか)として選んだ地はこの町でした。

海外での日本語教師生活の最後は中国・長春の大学。セ氏氷点下30度の12月、寒さと環境の変化でかぜをこじらせ、4カ月間で帰国する結果になつてしまいました。

「今はこの空気を吸って、ここにいること自体が幸せ」。こう話す言葉には、その時の経験があるのかもしれません。「ボールペンのインクがきちんと出る、ノートの紙にきちんと字を書ける、というのは、中国では信じられないことです。日本は魔法の国だと思いますね。食べ物もおいし過ぎる」。

中国長春工程学院での講義(2006年)



初めてのアフリカへの旅は31歳の時、モロッコへ(スペインからフェリーでセウタの港町へ)



自筆の店名が特徴の店舗エントランス



ネパールにて



小さな店内は落ち着いた木の味わい



モロッコ人旅はサハラ砂漠へと続きました

おおしま えいこ
大島 栄子さん/喫茶去「作業(さくら)」経営/第26区/☎82-5889
群馬県前橋市出身。55歳。神田外語学院(東京)卒。中国・長春の長春工程学院(工業大学)などで日本語教師(2004(平成16)年)。昨年3月、南町の住宅団地、グリーンビレッジに自宅兼喫茶店を新築開店。北工学園旭川環境福祉専門学校の短期留学生日本語研修講座で日本語教師。18歳、高校生の時に北海道旅行したのをきっかけに「世界見て歩きの旅」に目覚め、40代まで米国、モロッコ、スペイン、ギリシャ、イタリア、フランス、モンゴル、中国など世界各地を単身旅行。独自の国際感覚を持っています。